

## 偉大な読書人の晩年

——内田魯庵伝ノート（十五）——

野村喬

魯庵は、何度も書いて来たように、決して社交的な人ではなかった。若い時には一種の文壇ジャーナリストの立場も手伝い、且つは興味半分もあり、多くの作家・文人を訪問したり交際もしたが、彼は、煙草は好んだけれど、酒を嗜まなかったし、紅燈の巷に娼婦と遊ぶこともなく、勝負事も避けたから、しぜん文壇から孤立していた。ほとんど唯一無二の友人が二葉亭だったが、その死去後には、淡島寒月などの昔の知人らをたまに訪ねること、或いは又玄会などの趣味人の会合に出席したり、時々美術展覧会や劇場での観劇に出かける程度で、丸善に行くほかは、もっぱら書齋に閉じこもることが多かった。

もう一人の友人として、妻敬子の長兄の布施謙太郎がある。東京大学卒業後に大蔵省に入り、大正三年に台湾の淡水税関事務官をして亡くなっている。文学とは無関係の人であり、テニス、ボートなどスポーツを何でもこなす快男児で、二葉亭と同じく魯庵と何回となく絶交を繰り返しながら、やはり仲直りするように、肌の合う友人であった。謙太郎の弟の山家謙次郎と布施謙三とも気が合ったし、殊に謙三とは、彼が東京商船学校を卒業し東洋汽船に入

社し、外国航路の船長をしていて、日本に束の間の滞在をしている時に話す外国の模様を、本や新聞雑誌で承知している知識を補う絶好の機会にしていた。特に、謙三が南米航路についている折に、持ち帰ったインカの古陶器をずいぶんと大事にし、誇りにしていた。なにしろ、魯庵はあんなに豊富に外国知識を持ちながら生涯遂に海外旅行に出かけなかった。そのくせ、「何人も洋行の必要あり」(「新潮」大2・4)と力説していたのだから面白い。たまに関西地方に赴くことはあったにせよ、それより以西には旅をせず、北は日光、東は千葉、西では浜松ぐらいが魯庵の旅のコンパス範囲であった。

その代わりに、彼は家庭生活を愛していたと言えよう。九歳年下の妻の敬子とは晩婚だったが、きわめて琴瑟相和の関係を保持した。敬子との間に三男四女を儲けた、七人の子と言えば、当時でも子福者の内に入るだろう。明治十三年十二月十五日に長男の巖、同三十六年四月二十一日に次男の健、同四十年四月二日に長女の百合子、同四十一年八月七日に次女の田鶴子、大正二年十月三十一日に三女の茉莉子、同六年一月七日に四女の恵美子、同七年三月三十一日に三男の穆が誕生している。三男の穆は魯庵五十一歳の子ということになるから、夫婦仲の睦まじさが想像出来る。

彼は、その子女を分け隔てなく愛した。夏には、妻子ともども避暑に赴いた。行き先は後に軽井沢などにも行ったが、多くは沼津などの駿河湾海岸、または富士山麓などであった。決して贅沢な避暑生活ではなかったが、〈案頭三尺〉の「避暑地改造」(「太陽」大10・8)において、避暑排斥論者を批判して「休養が人間に必要である以上は、一年中の最も疲勞し易い夏期に避暑するは決して無用ではない」と力説し、しかしながら、大戦後に中産階級が滅びて避暑地が金権階級に壟断されたことを問題とし、国営のリゾート地建設と温泉国有を提案しているように、若い時分から、山間や海辺の温泉を好んで夏に行くことが多かったのを、家族の団欒の機会としても利用していた。

魯庵は、決して世のいわゆる西洋かぶれの人間ではなかった。日常の衣服はもっぱら和服であった。洋服は作るこ

とは稀にあったが滅多に着なかつた。洋服姿の写真はたった一枚しか残っていない。背の低い自分には似合わぬと自覚していたのだろう。丸善では、魯庵が積極的に、広告文案も書いて、万年筆を輸入し、ステッキを輸入した。そして、実際にオノトやウオーターマンの万年筆で原稿を書き、博文館が日記帳を発売するや、それにも万年筆で記した。日露戦争後に、家庭用の写真機が輸入されると、購入して、愛する子供たちの成長する姿を絶えず撮影した。さらに、蓄音機が発明され、レコードが発売されると、魯庵は、それを家庭団樂のために喜んで使った。もっとも、今どきは写真機でなくてカメラ、蓄音機でなくLPプレイヤーとアンプとスピーカーのステレオセットであろうし、だいたいは今日ではもう、テープ・デッキでさえ古く、CDデッキの時代かも知れない。

魯庵が「私の趣味」という『婦人画報』(大12・4)のもとめに応じた隨筆で「私の趣味は廣過ぎる、勝負事を除いては大抵なものに多少の趣味を持ちます。唯封建の臭ひのする茶の湯だとか謡曲だとかいふものは余り好きません。最う一つは貧乏ですから勢ひ安價な趣味に満足する外はありません」と前提して、「私の家族の共通趣味は音楽です」と云つて一人でも満足に音楽の出来るものはありません。殊に私の如きは丸で音楽の耳がありません。けれども響のくせに音楽は好きです。子供達も揃つて皆音楽好きで、専門的に音楽を授けてゐる子も音楽家とならうといふ小さな空想を持つてゐる子もありませんが皆音楽好きです。夫故に蓄音機が家庭の共通娛樂で、レコードが澤山あるわけではありませんが小さなレコード・コンサートが家庭で屢々開かれます。カルーソーだのガリクルチだのシャリヤピンだのイザエだのといふ高名な音楽家の名は舌の十分廻らない小さな子にまでお馴染みになつてゐます」と書いてゐるのは、本当の話であつた。

今世紀に入らうとする頃に、日本にもリヒャルト・ワーグナーに關しての紹介や論評がはじまつた。多分、その音楽というよりも当時にニーチェやショーペンハウアーの哲学思想が論じられたのにつれて、彼等が論じた文章からワーグナーが輸入されたのだろう。魯庵も、「リヒャルト・ワグネル」〔學燈〕明36・4)にはじまり、「ワグネ

ルに現れたる「永遠の女性」―「さまよへる和蘭人」を中心として」(『婦人の友』大14・1)に至る隨筆を残している。魯庵が聴いたのは、むろん当時の赤いレーベルのSPレコードによってであろう、と微笑ましく感じられるが、日露戦争前に姉崎嘲風が紹介したとしても実際に聴くことなしに報道文献によってであるのに比較すると、まだしもだったと思われる。

芝居も好きだった。まだ独身時代に屢々歌舞伎だの浄瑠璃だのを観たり聞いたりした。日露戦争後の新しい文学には、さして共感しなかったし、次第に文壇から遊離した魯庵だったが、自由劇場や文芸協会・芸術座でイブセン、ストリンドベリ等の翻訳劇も、大正期に歌舞伎役者が挑戦した新劇も、「暫」や「助六」等の古劇も、好んで観た。芸術座では魯庵が訳した『復活』の劇化上演も果たしている。そうした場合に、家族同伴で行くのが普通だった。言うならば、魯庵の家庭は大正期の知識階級の内でも最も進取の氣象に富んだ家庭だったように見える。長男の巖も父の感化あるいは影響を受けてオペラに熱中したりしている。

食べ物では、魯庵は若い時から牛肉を好んだ。とりわけビーフ・ステーキが好きだったし、アイスクリームやケーキの類も好きだったのは、やはり少年時に築地居留地で育ったのが原因したのであるうか。他方で、江戸っ子らしく秋刀魚、くさやの干物、鰹、鯛、飛魚、鯉汁、柚子と似た里芋、そして上等の海苔を毎朝の食膳に欠かさず食べた。一枚の海苔を魯庵は焼いた上で、丁寧に切り揃えさせた。菓子では、かき餅と塩煎餅が好物だった。

嫌いな食べ物もあった。その代表的なものが、お新香だった。糠味噌漬にした野菜を口にしようとしなかった。これは、わたしが魯庵長男の巖の未亡人しづさんから聞いた話だが、妻の敬子も子供たちも好きだったから、食事時になり、はじめは食膳に出さず、魯庵が食事をさっさとすませて書斎に消えたと、残った家族は、それと大鉢に盛ったお新香を食膳に載せて、皆で、おいしい、おいしいと連発しながら食べるのだった、と言う。なぜ、魯庵は嫌ったか。わたしの推測するところでは、魯庵は幼時に母を亡くし、地方官として父の正が、魯庵を親類に預けて赴任し、

父が帰京後も彼一人は義母との同居を嫌って下宿生活を長年にわたってした結果、下宿屋では、沢庵の切れっぱし以外は決して食膳に出さない、お新香という最も家庭的な味を知らずに過ごしたのではなかったか。好物の海苔を奇麗に切り揃えさせたのも、下宿屋の食膳に出すやりかたに馴れたからだろう。

魯庵は、決して頑健ではなかった。彼の母は二十八歳で、父も四十九歳で亡くなったから、虚弱体質は両親から譲り承けていた。家庭を持ってからは、輸入品の精巧な秤と乳鉢を購入し、医師の診断とカルテの処方をもとに、自分で薬を調剤してもいた。彼の子供も揃って虚弱体質であった。「私の家は去年から病魔に祟られてをる。去年の春は病院へ送つたのが二人、家で臥てゐるのが三人或は四人、醫者が毎日二回来診した。時としては三四回来た事もあり又他の醫師が来た事もあつた。二月月足らずを殆んど病院の往復と醫師の應接と入院料や診察料の算段とに暮らしたが、夫から続いて毎月病人の絶えた事が無い。今年は又恰も今、入院してゐるものが一人、家で臥てゐるものが四人、貧乏書生の身分ではやり切れたものに非ず」(「喫煙録」『太陽』大9・6)と慨嘆している。健康保険の無い時代だから、医療費も大抵のことではなかったろう。長男の巖も名前のわりには、幼少から病氣をしては小学校を長期休学する子供だったが、魯庵の最大の不幸は五十歳代に二度も子供に先立たれたことであつた。

大正九年七月二十七日、長女の百合子がバセドウ氏病で世を去つた。彼女も幼い時から体が丈夫でなく、小学校の中途からは一年の三分の一は休学してばかりいた。実は一年ほど前から発病していたのだが、この年の春に雙葉高等女学校に入学して三カ月経過した六月下旬に、腹に蟻虫が出来て日比谷の胃腸病院に入院したが、元氣になり退院して三日目、その朝も病床にあつても快活だったのに二時間後突然に心悸亢進が起こり、急遽、日比谷の病院に往診を依頼したが、応じてくれない、止むを得ず平生懇意にしている医師に頼み手当てをしてもらつたものの、危篤状態が続いた後、翌朝未明午前三時に息を引き取つた。魯庵は「子の喪に籠つて」(『太陽』大9・9)で、ほとんど慟哭している。

百合子は愛らしく美しい少女だった。魯庵の家に明治二十年代の末頃、読売新聞記者として訪れた関如來は、その後も屢々来ていたが、如來の娘の鑑子を世間は「薫が篤を生んだ」と評判したが、百合子も四歳でオルガンを弾きはじめ、八歳で今井慶松から箏曲の奥許しを得るまで琴に才能を發揮していたし、長期欠席が多かったのに、小学校を通じて常に優等生に選ばれていた。魯庵の家にしげしげ訪れる青年の木村毅や柳田泉が、長男の巖に対して、魯庵夫妻の間にどうしてあんな美しい娘が生まれたのだろうと語ったし、当時早稲田中学にあった巖の友達の中には、百合子を見たいため遊びに来る者もあったし、雑誌社や新聞社の記者も彼女が取次に出るのを楽しみにしていた、と言う。内輪の葬儀には、巖の友人の近藤柏次郎がベートーヴェンの葬送行進曲を奏で、魯庵は彼女の好きだったレコードでシューベルトの軍隊行進曲をかけて、出棺した。葬儀の後、魯庵は、自ら撮影して来た写真によって、私家版の写真集『百合の花びら』を印刷し、我が子の思い出のために配った。その写真集の扉に「ソロモンの栄華をだにも恥ぢざりき百合の蕾のめでたかりしよ」の一首をしるした。その費用にと、金尾文淵堂の主人は金高を記してない小切手を渡した、と内田巖は「繪画青春記」に書いている。

長男の巖は、両親が買ひ与える少年雑誌やお伽噺や絵本を恣に読み眺めて育ったが、父の書齋にある書籍を留守中に自由に見たことから、錦絵に興味を持ち、暁星小学校五年生の時に、病氣休学で一年遅れた間に、ずいぶん早熟な子供になると共に水彩画を始めた。暁星中学に進んだ頃、一方で春期発動期を迎えて性に目覚め、他方で死について悩む日々が続いて二年生になって、母の知り合いだった中田信二に惹かれてホーリネス教会の狂信徒になったりした。なにしろ、母はメソヂストの信者であり、父の妹すなわち叔母の夫の三並良は一高教授だったが、熱心なユニテリアン教会の牧師で、暁星はカトリックのミッション・スクール、友人には聖公会の信者もいると言うわけで、周囲にクリスチャンは一杯だった。両親が中田に対して批判的だったために次第にホーリネスの熱は醒めたが、四年生の時、学校でスーザ・カルドーザの兎の絵を描いたことと、机に小刀で彫刻をしたことが問題となり、あげくの果てに不良

視されたことに反撥し、級友たちとストライキを計画して放校処分になる。魯庵は、我が子のことは伏せて「外人経営の中學教育の現状」(『太陽』大6・3)を書いた。

この時、魯庵は学校に行つて、暁星の幹事に面会し、それが教員會議の結果として確定したものでどうか、と鋭く質問し、校長の独断と知つて怒り、転校手続きを要求し、二学期から早稲田中学に転校させた。早稲田中学の校長は時に会津八一、教師に田中達、山口剛、横山有策、増子喜一郎らが居た。転校するや否や、巖は会津八一が顧問の美術部に入り、さらに野球部に入った。無事に卒業したが、高等学校の入学試験を二度うけたが落第し一旦は法政大学の政治経済学部に入學した。しかし、学校に行く代わりに川端童子の絵画研究所にはかり行く。それを見た魯庵は、巖に絵画をやれと課題を与え、一度目の入学試験に失敗した後に東京美術学校に入學するのである。妹の百合子が病死したのは、巖の言わば浪人中の出来事だった。やがて、小学校時代の旧友の近江晋作(戦後に社会党の代議士になった島田晋作)に誘われて、その兄の小牧近江の始めた「種蒔く人」の発行元の種蒔き社を訪問したり、長谷川如是閑の創刊した「我等」を愛読するようになる。また、村山知義や柳瀬正夢に影響を受けたりしながら、大正十五年に美術学校を卒業する。

魯庵は、子供の将来に関して、教育に関しては、原則として放任主義をとっていた。全国を吹き荒れた赤化学生処分問題についてのアンケートに答えた「我子の場合」(『中央公論』昭3・1)という随筆で、「小生は萬事、子は子、親は親として我が子の進退行蔵には餘り干渉しません」と、はっきり述べている。

その通り、魯庵は子供の針路については、決して強制しなかった。その現れが、公立の小学校や中学校よりは規則に縛られずに、のびのびと自由に勉強出来るに違いないと、私立学校に入れたと考えられる。長男・次男は暁星学園、長女・次女・三女は雙葉学園であったが、その後は考えが変わつて公立の学校に進ませた。巖が暁星から早稲田に転校の後に、次男の健も獨協学園に転校させた。巖の場合はフランス語から英語へ、健の場合はフランス語からドイツ

語に外国語が変わるのだから、息子としては大変だったろう。それでも、魯庵は自分の少年期に築地のミッション・スクールで過ごした経験から、大丈夫だと信じていたフシがあった。

しかし、魯庵の二度目の災厄が訪れる。次男の健が大正十二年一月一日、腹膜炎のため亡くなる。この子は、獨協中学の学業成績も優等生、常識健全であると共に、音楽部のリーダーで、野球部の主将でもあれば、アメリカン・フットボールや陸上短距離の選手でもあるという魯庵の息子と思われないタイプであった。小学校の時期には病気をせず、運動競技が好きな子供だったが、決して、スポーツ万能の頑強一点ばりの少年ではなかった証拠に、中学生になって野球に夢中になったばかりに、肋膜炎をわずらい、一年半休学したことがある。医師から再び野球をやってはならないと警告を受けていたのに、進級が遅れて五年生の春、早稲田実業との試合に八度五分の熱があるのに投手としてプレートに立った。それでまた、肋膜炎を再発し、腸結核になり病床の人になっていた。秋が過ぎ、冬になった十二月の半ば頃には、一時、瞳孔が開き仮死状態に入ったものの、甦って二週間、医学上は満悦状態と呼ばれる不思議に元気で、野球部の仲間を集めて御馳走したり、新チームの編成の相談をしたりした。

来年になったら、運が開けて全快すると信じていた。しかし、大晦日の日の十時まで外国野菜のカタログを見て赤鉛筆でアンダーラインをつけていた健は、鉛筆をポロリと落とし、好きなレコードをかけてくれと言ったものの、もう聞く気力を失っていた。除夜の鐘が鳴ると、母は「もう元日だよ、さあさあ元気におし、今年はきっと治るよ」と言った。健は低い声で「ああ、天麩羅が食いたいなあ」と言って、眼を閉じた。そのまま、午後三時半に永眠した。あと三カ月で満二十歳になる青年であった。

魯庵は、『太陽』二月号の〈案頭三尺〉に「運動競技の犠牲——教育家の考慮を希望する——」を執筆し、学生生徒の健康状態について教育当事者が、「近代思想」についてはベストのように恐れるが、「學校競技がイッとなく興行物となり、學生運動家の精神が商賣人化した」状態についての注意が払われていないし、時には「學校廣告の手段と

して益々學生の熱度を煽り立てる」る学校や、「青年の功名心を挑發する」ジャーナリズムと運動競技の弊害には知らない顔をする文部省に、文句を書きつけた。

つまり、魯庵は『太陽』の毎月の連載社会時評では、一貫して政府当路者が、国民や青年の思想問題にはばかり干渉することを排除しつつ、身近なところでの問題を自身の家庭の事件をも応用して注意を喚起していたのであった。

なにしろ、彼は、徹底した権力嫌いで人民平等の主張者である。「民衆思想の勃興と貴族」(『解放』大9・8)では、明治維新後の華族制度にメスをあて、「無能者が華族である爲めに特權階級を作つて有爲の人材の活動舞臺を狭くするは一國の文化の爲めの大損失」と述べ、「釋迦と基督とマルクス」(『改造』大9・8)では、「現代の精神的脅威或は産業革命に原因する經濟的不安が大に與つてるのだから、釋迦基督にカント、ニュートンを搦交せただけではマダ現代人を濟ふに不足してをる。少も之に加ふるにマルクスを以てしなければ以て現代人を濟ふに足るの新宗教を作る事は出來ないと思ふ」と書いている。それは『マルクス・エンゲルス全集』の翻訳刊行が伝えられた際の隨筆で、「事實の上に立證されたマルクス思想の眞理」(『解放』大8・12)を記したことと噛み合う文章だったが、思想についての研究を恐怖することに対しては、絶えず嘲笑していた。しからは、魯庵はマルクス主義を奉じようとしたか、と言えば全然感じられない。出版されれば読んで見ようか、という程度である。それよりは、「物価問題」をはじめとする民衆の經濟的不安の除去を当路者に望んでいた、と言っている。

彼は「私の家にはラヂオが無い。ラヂオのセットを買ふ餘裕が無いといふ以外には格別の理由も無い」「だが、ラヂオも矢張文化生活の一つの道具である」(窓から眺める)『太陽』昭2・12)と記した。ラヂオ放送がまだ始まったばかりだから、備えていなくなつて恥でもなかつただろう。問題は「買ふ餘裕が無い」と書いている点だ。

『貧困時代』は何十年來終始一轍、恐らくは死ぬまで繼續するだろう。従つて切抜けるも何もなし。歳月は貧を待たずして過ぎて行く。従つてまた毎年の正月もまた相變らず、餅を搗く外は正月らしいことを一切せず、生活改善

と云ふやうなことは、何十年も前から（獨り正月に限らず）萬事實行してをる。冠婚葬祭の頃はしい『禮儀三百威儀三千』は、お金持のすること、小生輩無産者の與り知らざるものである」（『貧困時代は終始一轍』『主婦の友』昭2・1）とも記している。

頻りに、魯庵は自分が貧乏であることを強調している。むろん、魯庵は一度として官途についたわけではない。従つて、官吏が五十歳に達して退職したならば、悠々自適、恩給生活を営むことも出来たろうが、彼は生涯にわたつて執筆生活と丸善の顧問料で家族を養つた。絶対に自分の持ち家を建てようとするのが不可能ではなかつたにしろ、子供の時分に親の家に住んだことを別にすれば生涯を借家住まいして終つた。その借家に満足していたかと言へば、常に不満を持っていたし、若い時は二年に一度は引越しをしたほどであり、最晩年でも関東大震災の発生時は、現在の山手線新大久保に近い豊多摩郡淀橋町柏木に住んでいたが、震災の翌々年大正十四年二月に戸山ヶ原のはずれの大久保町大字百人町（経済学者の大内兵衛の持ち家で、大内の隣家）に転居、さらに四年後の昭和四年六月に代々木八幡町大字代々木に転居している。

\*

淀橋町柏木に引越するまでは、結婚した当座の江戸川べりの牛込一帯の中であちらこちらと移転した。言わば牛込区から府下におん出たわけである。東京の小市民家庭が次第に西へ西へと住宅区域を移動していたのに、魯庵も追隨した恰好であった。

その移動につれて文化住宅というものが出来て、小さいながら応接間のある家も出来たが、魯庵の家にそれはなかつた。代わりに、居間兼応接間の書齋が魯庵の城であった。

書齋について例えば、『書齋の Past & Present』（『中央公論』昭3・1）に、

ツイ先頃の事、或る雑誌で書齋の好尚を題目として各方面の名士の廻答を集めて掲載した事があつた。其中

に或る錚々の民間建築技師が書齋は學者操觚者外には必要の無いもので、自分の如き現に書齋を持たない一人であると答へたのがあつた。此の建築技師は一方に興味家としても相當に聞えて新時代の理解もあるやうに聞いたが、御當人自身が書齋を持つてゐるか否かは別として、若し書齋が學者操觚者以外の一般人に必要であると(アイロニーで無くして)ホントウに思つてゐるなら新時代の理解の程度も大抵想像される。(中略)

但し書齋といふと架上萬巻、錦軸牙籤を列べ文房器玩を飾つた贅澤な美室を聯想するが、文化生活が必ずしも赤い屋根の家を指すので無いと同様に、爰に云ふ書齋も亦、必ずしも數寄を凝らした風雅な離屋や三越仕込みの歐風家具を列べた別棟の洋館を云ふのでは無い。三疊でも四疊でも讀書安息を目的とする主人専用の燕居の室を指すのである。

と述べつつ、読書の趣味の普及には、一般人にも書齋が必要不可欠であることを説いている文章の中で、魯庵は「書齋は一つの藝術」として支那式、歐風、日本風の書齋について蘊蓄を傾けたあげく、自分の書齋は「一番塵埃臭くて貧弱を極めてる」と白状する。

ツイ此頃も或る書店の編輯員が來た時、丁度捜し物をしてゐる最中で、常よりも一層散らかつてゐたので、『ドウモ大變散らかして了つて……丸で大掃除サ、』と些かテレ秘しに云ふと、お世辭のツモリだらう、『ドウ致しまして、先生の御書齋は有名なもので……』と云つた。何が有名なんだ？ 散らかつてゐるのが有名では恐縮する。(中略)繰返して云ふやうだが、書齋で無くて仕事部屋だから断えず散らかつてゐる。座り草臥れてゴロツと横にならうとすると手も足も悶へて、樂にカラダを伸ばす事が出来ない。其上に滅多に帯を掛けなから、机上三寸の塵を愛するわけでは無いがイツデモ塵が積つてゐる。明窓淨几は我々には別世界である。と書いている。その書齋の模様について長男の巖が「父の書齋」で、

明治四十五年頃、大きなデスクとグルグル廻る椅子を父は買った。そしてそのデスクは可成お得意らしく、

お手のもの、写真術で、デスクを中心とした彼自身の姿を数葉カメラに収めた。始めピントを父が合せて、少さかった僕が玉を握った。(中略)だがこんな風な写真を撮りながら、実はデスクで仕事をすることは殆ど無かった。デスクはいつか室の片隅に置かれて、ペルーの土器や、シヤムの佛様を載せる装飾棚になり、父は相変らず日本風に小さな机の前にアグラして物を書いてゐた。晩年の大久保百人町の書齋は大内兵衛氏の持家で、床の間なしのキルク敷の十畳で、ドア一付きで寧ろ洋風に適してゐたのであるが、父は相変らずアグラで書いてゐたし、疲れると畳ゴザの上へゴロツと寝転んでゐた。書籍の散乱した室の空所に或時椅子が二脚置いてあつた。偶然来て書齋に通された雑誌記者の某氏は父と挨拶がすんでも、父が一向椅子に腰かけず坐つてゐるのに自分だけ悠然と腰かけてゐたのですつかり間を悪くしてしまつた。父は殆ど書齋を解放的にと云ふよりは応接間を持たなかつたので誰でも直に書齋に通するのが常であつた。(中略)父が晩年愛用したと云ふよりは使用してゐた小さな机は経机で旗艦三笠の艦材で造つたもので、いつも相馬屋の原稿用紙と万年筆が五六本載つてゐた。若干の粗末な本箱や三つ四つ小さなライブラリー・セットがあつて、入れ切れない新刊、古書、和漢洋書雑誌類があちらこちらに散乱し堆積し身を持つる場所は二畳にも足りなかつた。どんなに散らかつてゐても氣の向く迄は手を付けさせず、本を動かすことを禁じてゐた。散乱した本の中に土俗人形や仏像やインカ等が趣味的存在として書齋のニューアンスを形成した。香り床しい蘭の一鉢が時として品の良い見栄を匂はせた。(中略)多くの文士の書齋と同じく父の書齋も決して整頓された文化建築展の模型ではなかつた。父の空想が過去現在未来東西の書齋生活を其趣味随筆中に跋渉し得るとも、現実に於ける父の書齋は矢張り明窓淨几ならぬ生活戦場であつた。貧乏に迫はれて死んだ父魯庵の書齋への憶出も亦懐しきル・プチ・シヤンプルであると共に父の職場への机上三寸の塵に対する生きた一つの記憶である。

と描いている。巖は、さらに「客観的に父の一生を眺めたとしたら父は父自身の云へるが如く『芸術家でもなく、学

者でもない、デレタント』でしかあり得なかつたが、父の特徴はデレタントでありながらデレタントに挑戦する他の面を常にその内容に置いてゐた事だと解釈したい。そんな風に父の生活は枝豆と塩せんべい、かきもち海苔とピフテキを愛しながら、食通的にこれ等も別に吟味するでもなかつた。そして破れたシャツ、壊れた眼鏡、砕けた前歯で晩年の父は古今東西の書籍の中に埋もれながら、趣味随筆を書いてゐた。(中略)一切を喰ふ為の方便にしかなし得ない父の境地、疲労が筆力の苦澁を極めながら、書き上げたのが晩年の趣味随筆であつた」と記している。「破れたシャツ、壊れた眼鏡、砕けた前歯」とあると、つい先ほども自分で貧乏を強調している文章を引用したから、内田家はよほど貧しかったのだと誤解されるかも知れない。大急ぎで修正しておこう。確かに魯庵は金持ではないし、たいして余裕があつたわけでもない。しかし、丸善の顧問料と原稿料の収入は通常のサラリーマン以上であつたことは確実で、内田家には女中が二人居たし、娘のためにピアノやオルガンも与えた。次女の田鶴子が後にピアニストになるのも、そうした素地があつたからである。外出には電車も使用したが、けっこう自動車を使つていたのである。シャツや眼鏡や入れ歯の件は、面倒を嫌つたり億劫がつた結果である。だが、一家の中で絶えず病人が出たことは、当時の医療現状ではたいへんな負担であつたことは確かだつたらう。

魯庵をデレタントと書くことで、この長男は、父を強く意識して、自身に鞭打つていたので、とわたしは思う。たしかに、晩年の魯庵は随筆家として世を過ごした。

しかし、彼のエッセイストとしての活動は、今日もう一度評価されていいのではないだろうか。

前章で、わたしは『太陽』に十年一日のごとく、連載した社会時評をいささか吟味した。大正二年一月号から開始された〈書斎の窓より〉は同五年十二月号まで、同六年一月号からは〈案頭三尺〉は同十二年四月号まで、時として病氣その他で休載することもあったが、まことに十年一日の文字通りに書いた。その後、年号が変わつた昭和二年十一月号からは〈窓から眺める〉として同四年二月号まで寄稿したあげく、最終回に『太陽』は終に休刊するさう

だ」と記す「太陽」の条を書きつけた。「三十何年間毎月論壇を賑はして時論の中心舞臺であつたのが突然閉鎖してつたのは何としても心残りに堪へない」と記す時、週れば明治二十九年初頭に民友社と訣別して以来、博文館とこの雑誌に魯庵は絶えず寄稿し続けたのであつた。魯庵にとってこの舞臺は、他にも幾つかの婦人雑誌と『中央公論』『文藝春秋』などの雑誌があつたものの、社会時評家——それは、例の『社会百面相』のコント・シリーズの系譜につながるジャーナリスト的活動の場であつた。

巖が言うところの趣味随筆の方は、大正九年五月〜六月に『讀賣新聞』に三十回連載した「猿の舌」、さらに同年十二月から翌年四月まで同じく『讀賣新聞』連載の「バクダン」があり、大正十三年五月の『東京日日新聞』に二十六回連載の「蠹魚の自伝」等がある。バクダンとは、猿談であつて物騒な爆弾のことではなく、猿は内田家で飼育していた犬の名前だつた。本当はバクではなくてバクと呼ぶのらしいが、夢を喰うという動物の猿から名をつけたのが、夢理想を消す意を託しているように思えて楽しい。しかし、犬の話ではなく、要するに魯庵の博識から飛び出して来るエッセイだつた。

「猿の舌」では「御一新の舊弊退治」「今昔較」「明治初年の言論自由」「漢語全盛の文明開化」「佐田介石及びランブ亡國論」「ポスター宣傳」「納札の過去現在未來」「蒐集家」「郵便切手と玩具」「世界的蒐集」「野蠻人の藝術」「ネビンソン」「埋もれたる天才」「三百年前の日本人虐殺」「キシシーネフの虐殺」「切支丹迫害」「リンチ」「猫」の十九項についての随筆、『バクダン』では「醫者と菜」「葬式」「クリスマス」「悪魔拂ひ」「學者文人の歳晚」「正月改善」「元日」「年頭葉書」「骨牌」「床の間療止案」「新畫」「贖物」「新聞の訪問記事」「新聞記事の Topsy-turvy」「英國衰亡論」「風」「兵役拒絶の宗教」「危険思想の發生地」「革命と文人」「素人寫眞」「早取寫眞」「撮影機」「廣告」「手紙」「青鞨」「火事」「家」「建築的キューリオ」「化物屋敷」「怪談」「百物語」という三十二項の随筆である。これらの項目についての蘊蓄を傾けながら、時々魯庵らしい諷刺を利かせている。意外に評判となつて、大正十年五月以前

に書かれた「猿の耳垢」を付録にして『猿の舌』、同十一年十一月に『バクダン』が共に春秋社から上梓され版を重ね、後には袖珍本（縮尺版）も世に出てもいる。

当然にも、多年にわたって魯庵が編輯して来た丸善の『學鏡』の編輯活動を忘れてはならないだろう。明治三十四年九月に丸善に入社し、書籍部顧問になった魯庵は、それまで『學の燈』の誌名で発行されて来た宣伝誌を三十五年一月号から『學燈』（翌年には『學鏡』に改題）と改題して、自ら編輯を引き受けた。彼は、この『學鏡』の仕事を大正九年に実務から降りるまでおこなっている。その間、世間に通用している魯庵生の筆名も使用するほか、ほとんど無数の筆名（それは匿名と同じものと考えていい）を用いて、雑誌の埋め草を書いた。誤解されてはならないが、魯庵唯一人で編輯にあたったのでも、埋め草原稿を執筆したのでもない。それに、魯庵の仕事は元來は『學鏡』編輯にあったのではなく、まさに丸善の洋書輸入の相談役だったし、書籍以外の洋品輸入の相談にも与かったのである。つまり、魯庵はまことに律義な人であったと思う。

『學鏡』における埋め草の署名で、汀隈生・灯影・藤東田・代々木散人はすべて衛藤利夫の筆名であった。たぶん、鄭隈生・越原富雄・荊溪生なども魯庵以外の別人らしい。衛藤利夫の筆名については、衛藤利夫著『短檠』（満鉄社員会刊行）の跋文にある尼崎晋之助の編輯記によって明らかである。汀隈生がTY生をもじったものであるからには、鄭隈生も同じだろうし、荊溪生はKK生であり、KKのイニシアルの人物だろう。ゼンパチ、DON八、ドクトル・トンソン、西武敏郎などは、魯庵が大病罹患中や死後も執筆していることになるので論外である。この考証が全くおこなわれていない文献が多過ぎるし、それについて無知な学者・研究者が横行していることを残念に思う<sup>1)</sup>。それはともかくとして、魯庵が若い社員に埋め草原稿を書く自分のやり方を教えたわけだ。わたしは自分の経験からも、批評家が雑誌の編輯をすると、外部に依頼する原稿の集まり具合によって、ついつい、自分が埋め草を作ってしまうことになりがちだと考える。なお、ついでに言えば、衛藤利夫は大正九年頃、丸善を去って満鉄の依頼で奉天図書館長に

就任し、魯庵死後に内田家と相談し、所蔵の書籍の大部分を奉天図書館に引き取った。満洲時代の彼に二冊の本が残っている。

魯庵の編輯時代に「學燈」は、戸川秋骨や昇曙夢や野口米次郎が絶えず寄稿したし、魯庵らしい人物の文章で読者を惹きつけていた。彼が退いた後の「學燈」に水木京太が責任者となる間の寂れた雑誌と比較して見れば一目瞭然である。彼は、決して「學燈」を文学趣味で満たすつもりはなかった。それは、丸善という洋書輸入業者の目的に叶うことではなかった。つまり、欧米で注目の書物を日本に紹介する意味を第一義に置いていた。

大正十二年九月一日の関東大震災の当日、魯庵は柏木の自宅に居た。美術学校生の巖は猪苗代湖畔から戻って来ていた。一日から二科会展が開かれるのを観るつもりであった。その巖の『繪画青春記』によると、彼が昼時でライスカレーを食べていると、突然の地震で、いきなり天井から土くれや塵埃が降って来た。台所の茶碗類が壊れ、屋根瓦が崩れ落ちる音がした。よろめきながら一人の少女が入って来た。妹の田鶴子の親友の吉居静子だった。巖の母が彼女に「大丈夫です、大丈夫です」と言っている。二階から魯庵が「安政以来だ、安政以来だ」と叫んで降りて来た。家族全員と二人の女中も集まって、地震が少しゆるやかになった時、それっと言う魯庵の合図で庭の芝生に集合した。一月ばかり前に裏の家に引越して来た大杉栄が、浴衣を尻からげにした恰好で七歳の娘の慶子の手を引きながら裏木戸から入って来た。近所の安成二郎が写真機をぶらさげて入って来た。魯庵は笑いながら「その樹の下へ大杉に立って貰って撮すと良いよ、アナーキスト避難の圖という奴を」と言い、大杉は照れ笑いして、「おかげでせきたてられている原稿が暫く延ばせそうだ。良い休息が出来る」と言った。彼は、運動を続けながら半月に七百枚の原稿を書いていたのである。

父に「巖、吉居さんをお送りしろ、お母さんが心配されている」と言われて、巖は千駄ヶ谷まで静子を送って行きながら、彼女といろいろ話し合った。

大杉は毎日のように裏木戸から、魔子や三人の娘を連れて魯庵の家にやって来た。安成二郎は「社会主義者を皆殺しにしろと言っている」と青くなつて報告に来た。安成と魯庵の家は大杉一味だと思われたが、近所で自警団が組織されると、大杉もステッキを持って町内の一員として見張りに立った。「大杉も自警団で忠実に立っていますのよ」と多少自嘲気味に言ったのは、毎日のように遊びに来る魔子の母の伊藤野枝だった。

九月十六日に大杉と野枝が洋装で出掛けるのを垣根越しに見ていると、魔子が来て「パパとママは鶴見の叔父さんとこへ行ったの。今夜はお泊りかもしれないのよ」と言った。それっきり、大杉は戻って来なかった。「大杉は憲兵隊につかまって殺された、明日発表だ」と安成二郎が興奮して父の所に報告に来た。翌日、大杉虐殺の事件は堂々と新聞に発表され、魯庵は新聞を見ながらぼろぼろと涙をこぼしながら、じっと耐えているように見えた。母は、裏木戸から入って来た魔子が「御父ちゃんも母ちゃんも、宗ちゃんも殺されてしまったの」と言ったのを聞いて、「マコちゃん、マコちゃん」と呼んで泣き出し、遂に魯庵も声を挙げて泣きだし、二階に駆けあがった。

大杉のお通夜は村木源二郎以下の労働運動社の連中で催され、山本実彦、小牧近江、安成二郎と父魯庵が同志外から参列し、山本実彦はじめ文化人は連名で当局に抗議した。内田家に淀橋警察署の特高が三日にあげずやって来た。山本実彦は「大杉のお通夜の時の魯庵の姿ほど立派な姿を私は知らない」と後年語った。「大杉は藝術家だった。ソシアリストではない、大杉は藝術家なのだ」と魯庵は言った。

その翌々日、遺骸は余りに腐爛していたので、直ちに火葬場へ持って行き茶毘に付した遺骨が自宅に帰って来た。遺骨と三人の写真の前に好きだった葡萄酒と果物を供え、近親と同志と少数の友人とで形ばかりの告別式をおこなった。大杉の先妻の堀保子も最後の別れにやって来た。十月二日、魔子たちは野枝の九州の伯父に引き取られて行った。

魯庵は、「恐怖の二週間」(『太陽』大12・11)と「第三者から見た大杉」(『改造』大12・11)の二篇を記して、官憲の暴虐に抗議した。

翌々年すなわち大正十四年六月、春秋社から『思ひ出す人々』が刊行された。目次を写すと、「四十年前——新文藝の曙光」「美妙齋美妙」「硯友社の勃興と道程」「齋藤緑雨」「杏の落ちる音」の主人公「淡島椿岳」「鷗外博士の追憶」「最後の大杉」「三十年前の島田沼南」「二葉亭の一生」「二葉亭餘談」「二葉亭追録」となっている。

その扉に、「舊著『きのふけふ』の久しく絶版となれるを友の勸めるまゝに全部に涉りて増訂を施し、最近に発表した數家の憶出話數章を加へて改題して再び公けにする。古き酒は新しき革囊に盛りても新酒の匂ひのするものではないといふ人もあらんが、久しく棚に置古したる貧乏徳利を煤だらけのまゝに持出すよりはと新たに火を入れて再醸したので、利き酒は諸君の御批評のまゝである。一九二五年新緑 著者識」と記されている。なお、第一章の冒頭ページには「おもひ出す人々 四十年間の文明の一瞥 魯庵生」の万年筆書きの文字が凸版で印刷されているが、書名は題簽と奥付に従うことにした。

刊行した春秋社は、魯庵の『猿の舌』『バクダン』を出版し、『トルストイ全集』（魯庵訳『復活』も収録されている）を刊行中の出版社である。扉の文中の「全部に涉りて増訂」は嘘でなく、「四十年前——新文藝の曙光」は『きのふけふ』の「三十年前」の全面改訂であり、その他も改訂を施し、『きのふけふ』からは「淀橋の長者傳説」と「灰燼十萬巻」とを外して、新たに「鷗外博士の追憶」「最後の大杉」「三十年前の島田沼南」「二葉亭追録」の四篇を加えた。ちなみに、「鷗外博士の追憶」は大正十一年七月九日、森鷗外の死去に際して『讀賣新聞』に「逝ける文屋——森林太郎博士」を執筆後、『明星』に「森鷗外君」を発表した文章に修訂をしたものであり、「三十年前の島田沼南」は大正十二年十一月十四日に島田三郎が死去した際に『讀賣新聞』に連載した「卅年前の島田沼南」に修訂を施したものであった。

しかし、『思ひ出す人々』で異彩を放っているのが「最後の大杉」であることは間違いない。なぜなら、森鷗外にしろ、島田三郎にしろ、若い頃の知り合いで、近年は殆ど交際してなかった。しかし、大杉栄の場合は、文章の冒頭

に「大杉とは親友といふ関係ぢやない。が、最後のひと月を同じ番地で暮したのは何かの因縁であらう」と断った上で書きだされている。もちろん、魯庵は大杉が隣家に引越して来る前から全く知らぬ仲ではなかっただろう。が、あくまで最近の誼みだった。その人物を「思ひ出す人々」に包含するのは相当のことと考えていいだろう。世間から「危険思想家」と目されている大杉栄を「主義者肌よりは寧ろ文人肌だった」と評価した人間的交際を映しだしている。この著が、近代の名回顧録になった所以の一つと断言している。

ところで、関東大震災から一年後の大正十三年十一月に、明治文化研究会が誕生する。井上和雄が言い出し、吉野作造を中心に石井研堂、石川巖、尾佐竹猛、小野秀雄らが集まって出来た会である。翌年二月に機関誌として「新舊時代」を発刊し、さかんに講演会や展覧会を催し、やがて資料出版事業を企画し、昭和二年から「明治文化全集」を世に送り出す。つまり、この会は大震災で世の中が変化して行き、明治という年号の時代が遠ざかると意識し、今内に明治の思想・文化・制度の資料を保存しようと意図したのだ。この会の発足にあたって、魯庵は求められて賛助員に名を連ねた。

会の中心になった人々の多くが、特に「自由民権」運動時代に強い関心を抱いていた。「新舊時代」にその特集が組まれているのもわかる。魯庵も特集号(大15・8)に求められるままに寄稿しているが、彼は少年時にそれほど強く民権運動に共鳴することがなかった。彼は、壮士というものが好きでなかったからだが、遅れて明治文化研究会に参加する木村毅や柳田泉たちは、大正期なかばから魯庵の家に絶えず訪れていたが、揃いも揃って自由民権時代に強い関心を抱き、柳田泉などは後に「政治小説研究」を公けにするほどだった。木村や柳田や斎藤昌三たちに、魯庵は惜しみなく、明治時代の生きた記憶を提供した。この青年たちばかりか、世は俄に明治文壇に対する興味を示しはじめた。その時に「思ひ出す人々」が刊行されたことは、ある意味で実にタイムリーであった。

大正十五年九月の『明治大正文学の輪郭』(新潮社刊)に旧稿の「春暹家おぼろの功績・『浮雲』の価値・硯友社出

現の意義・紅葉の色懺悔」が収録されたのをはじめ、「銀座と築地の憶出」(『女性』大15・7)、「明治十年前後の小學校」(『太陽』昭2・6)、「原抱一庵」(『文藝春秋』昭2・8・12)などを寄稿させられたのも、その一つの証左だった。

しかし、その当時の魯庵が最も力をこめて書いていたのは、書物について世間の注意を喚起することであった。

関東大震災は、東京を焼け野原にしたが、罹災したのは人命や家屋や商品ばかりか、膨大な書籍・書類があった。

魯庵は、震災後直ちに「永遠に償はれない文化的損失」(『東京日日新聞』10・17・23)を発表し、さらに精査の後、

「典籍の廢墟」(『改造』大13・4・5)を書いた。その上で「圖書館の復興と文献の保存」(『報知新聞』大13・4・20・29)を書く。なかんずく、「典籍の廢墟」は、雑誌発表後に「大正大震災火災史」(大13・5 改造社刊)に載録され、後世に伝えられる名著述になっている。

この「典籍の廢墟」の内容について伝えるのは到底不可能で、読んでいただくほかないだろう。それほど個人の能力としては調査が行き届いている。焼失した文献を、(1)官公庁の国家的記録文書、(2)帝大図書館の世界的文庫、(3)帝大図書館所蔵の東亞最大の五大文献、(4)帝大図書館保管の各官庁から移管された文書、(5)帝大図書館所蔵の狩野亨吉寄贈の『自然真管道』『藤岡屋日記』や江湖に喧伝された古文書類、(6)安田善次郎蒐書の松廬舎文庫と黒川真道蒐書の黒川文庫、(7)佐々木信綱所蔵の『萬葉集』文献と井上通泰の南天荘文庫、(8)市川三喜所蔵の古典籍、(9)早川龍助所蔵の植物学文庫と小栗家所蔵物、(10)丸善が保有していた貴重書、(11)小林文七所蔵の錦絵、(12)市内の各寺院所蔵の典籍類、(13)その他の個人蔵書たとえば山口剛所蔵の稀観書三萬卷、細川賀茂所蔵の院本数千卷等々について、一々その内容を紹介している。しかも、東京のみならず横浜・鎌倉・小田原の各市における罹災にも調査はわたっている。原稿分量二百枚を超える報告内容である。魯庵は、冒頭に「藝術は永しへであつても之を盛るの書籍は決して不朽不壞では無い」と書きつけながらも、「寶冊秘卷の滅亡」に對しても亦萬斛の哀愁を抱いて痛惜し追懐するは讀書子の至情

である」と述べている。震災より半年後、この報告を記したこと、しかも失われた文献の内容について知悉していたところに、内田魯庵を措いて最適任者はないという判断が、存在していた点を注目していただきたい。喪失した典籍の内には、『藤岡屋日記』や『自然真宮道』のように、他処で発見されて戦後に復刻された文献もある。しかし、二度とわたしたちが目に出来ない文献も数多かった。それを「典籍の廃墟」で偲ぶほかない。

もっとも、魯庵は「焚書是非」(『大阪毎日新聞』大13・1・1〜6)の中で、「焚書は書籍の少なかつた時代に於てこそ文化の大惨害であるが、今日の如く印刷術が盛んで魚の卵を産む如くに書籍を濫造する時代に在つては焚書は格別の惨害も無いどころか、却て折々は書籍を焚いて了ふが自然の文献淘汰でもあれば讀書人の爲め無益の時間潰しを濟ふ所以でもある」という反語的表現をし、さらに、「客來つて曰く、お前は文化の大損失などと稱して焼けた本を數へたてたが、一體焚けたのがイイ乎、ドツチだと。答へて曰く、ドツチでもイイ」と問答を付け加えているのが、魯庵らしい。古来、天災や戦争・火事などの人災による書籍・文献の消失、政治上・宗教上の理由による焚書抹殺を考慮に入れ、書籍・文献の被った被害も思想や信仰を撲滅出来なかつたと考えているのは、流石と言わなければならぬ。読書人の至情と、文献保存に対する大局的見地と、この二面の弁証法的関係は、魯庵ならではのことだろう。

むろん、魯庵が親交を結んだ学者として、早稲田大学図書館長を勤めた市島春城、帝大図書館長の和田萬吉、京都大学文科長を文部省と衝突して僅か二年で退職し、在野の哲学者として生涯を送った狩野亨吉などの勝れた人物もあつたが、展望の広さでは魯庵が第一人者として指を屈していいのではなからうか。

明治期から大正期に移り、さらに関東大震災後、都市の知識人の間に書物蒐集が普及して行つた。その一例が、大正十四年十月に齋藤昌三の始めた『愛書趣味』という雑誌だったり、昭和六年創刊の『書物展望』だったりした。また、大阪の荒木伊兵衛が発行した『古本屋』も注目すべき古書趣味の雑誌だったりした。それに刺激されて、あちらこちらで古書店の目録も整備されて行つた。こうした趣味が高ずるところ、旧来の蔵書印に飽き足らず(理由は蔵書

を汚すからである)、エックス・リブリスすなわち蔵書票の流行につながった。魯庵は自身でも数種のエックス・リブリスを作ったし、「蔵書票」(『中央公論』昭3・11)のような随筆を書いている。その実物をわたしも持っているのだが、お見せ出来ないのは残念である。

魯庵は、「借家住ひをして一番苦勞するのは書籍である」(『移転記』『女性』大14・5)と記している。昔、三鷹に転居される以前の家を訪問して、談話たまたま罹災された本のことにと及んで柳田泉から聞いた話だが、魯庵の家にも無理算段して購入した貴重書がなくなかったが、常に家に置いてあるのは三千ないし四千冊程度で、恬淡と言うのか、本箱が一杯になると、古本屋を呼んで、一つ二つの本箱架蔵の書籍をひと思いに売ってしまうのを目撃したことがある。そうでもしなければ住んでいる場所がなくなる、と平氣だったとのことだった。わたしなどは、なかなか、それが出来ないで苦しんでいる。こんな話の中にも魯庵の真骨頂があるだろう。

つまり、魯庵にとって、蔵書は所蔵者が文化的貢献を目的にするから結構なのであり、さらに愛書趣味は結構なものだが、それは結局のところ、文化的享楽に尽きると考えていた。「讀書といふと依然學問の爲や教訓の爲とばかり思ふ者が今だにコピリ付いている」「今日の讀書家といふは大部分が壯年或は青年にて、五十年配以上の大多數は學者の階級を外にしては讀書に縁の無い人々である」「今日の文化生活上の讀書といふは決して單なる學問の爲や修養の爲でなくて、文化生活の必然的要件なる知識的レフレッシュメントである。讀書は決して堅苦しいものでも肩の凝るものでもなくして必然的に文化生活にともなふ知識慾を満足させる享樂の一つである」(『東京日日新聞』大13・11・7〜8)と述べた通りを魯庵は実践していた。

一體私は書籍を架上に列べたり堆かく積んだりして瞻めるよりも身邊前後に狼藉さして置くのが好きだ。殊に新刊書を机邊三尺の間に雜陳し、新しいインキや紙の臭ひを嗅ぎつゝ、鮮かな装釘の美しい色彩を瞻めつゝ、行當りバッタリに亂抽濫讀するを快とする。好著と信ずるものを必しも即讀するのでは無い。愚書と思

ふものも亦必ずしも放擲し去るのでは無い。偶然に寄贈された無名の著者の著述で接手即時に讀むものもあれば久しく待草臥れた名士の名著で、飛付くやうに買つて来たものでも本屋の包みのまゝにイツマデモ放たらかして置くものもある。

と、「讀書放浪」(『中央公論』大15・9)に述べる如く、彼は自称「讀書のウワガポンド」であつた。当然ながら、かつては書物を読みもしないで積み上げたままにしておくのをツンドクと非難したのだが、彼は、ツンドクも結構ではないか、読書は勉強でなく楽しむものだから、観るだけでもいい、という態度を採つた。こうした魯庵の讀書論を、ジャーナリズムは注目して次々と読書隨筆・書物隨筆を彼に求めた。言わば、大正末期における読書文化の推進者になつたのである。この魯庵の姿勢は、大正末期に開始された各種の全集本・円本時代を促す線上に、ぴったり合致したものと言える。

改造社版の『現代日本文学全集』、春陽堂版の『明治大正文学全集』、『日本戯曲全集』、新潮社版『世界文学全集』をはじめとして『日本隨筆大成』『世界美術全集』その他、知識階級の住居の一隅に、二の全集が必ず並ぶ時代が訪れるのであつた。

魯庵は、改造社から『現代日本文学全集』において二葉亭四迷と二人で一卷にしたと言ふ申し出があつた時、即座に拒んだ。とんでもない、自分は二葉亭と並べられるほどの文学者ではない、という理由からである。この全集は多くの作家に驚く程の印税収入をもたらした。したがつて、自分から売り込む作家もあつたらしいが、豊かではない魯庵が、敢えて拒絶したところに意味がある。その代わりに、第十卷『二葉亭四迷・嵯峨の屋御室集』(昭3・10)に「二葉亭を懐ふ」を書きおろして与えた。しかし、『日本名著全集』(同刊行会出版)の第十六卷(昭2・2)・第十八卷(昭3・3)に『南総里見八犬傳』上下を現代語訳して、いくぶん恩恵に与かつた(後に改造社版『世界大衆文学全集』に収められた)。魯庵は、和田萬吉が覆刻した『馬琴日記』(大13・8丙午出版社刊)に跋文を書いていた

から、適任者と見られたらしい。この本には例によって「八犬傳餘談」という魯庵らしい文章もある。幼い時に愛読した読本に回帰したような一幕である。

考えて見れば、魯庵のエッセイは『猿の舌』だろうが、『バクダン』だろうが、すべて彼の乱読・雑学の賜物だたろう。まさしく内田魯庵はこの時期の比類ない読書文化の体現者だった。

\*

魯庵は生来頑健な方でなかった。年中、医者と薬に親しんだ。と言っても、明治二十年代の文壇で先輩はもとより、同じ年配の文学者たちは既に次々と世を去っていた。子規、紅葉、二葉亭、学海、美妙、漱石、篁村、鴨外、忍月、寒月等々。これらの人々の中で割合に長命だったのは、依田学海ぐらいのもので、次いで養庭篁村・淡島寒月ということだろうか。忍月の亡くなったのは大正十五年二月だったが、ちょうど一月から三月にかけて丸々二カ月の間、魯庵は大腸カタルで闘病生活を送っていた。三度目の同じ病気だった。この間に忍月、寒月、愛犬バクが死んだことになる。魯庵は「病臥六旬」(『中央公論』大15・6)にそのことを叙している。なかんずく、寒月については「翁」と敬称し、懐かしんでいる。この年の十二月二十五日に大正天皇が逝き、年号は昭和と改元された。

以前ほどのことはなかったが、昭和になろうと、原稿の執筆分量は格別に変わっていない。しかし、魯庵の意識の中には、なにやら始末をつけようと言うような気持の動きが見えている。その一つが長男の巖の結婚だった。巖は、早熟だったし、何度となく恋愛をしていた。絵のモデルとも仲が良かったし、親友柳田勇の妹みどりにも恋をしていた。そのくせ、妹田鶴子の友人の吉居静子が毎日曜に家へ訪ねて来るのを心待ちにしていた。静子は母敬子のお気に入りだった。柳田の妹みどりが肺病で亡くなった時に、巖の気持が決まった。美校を出た翌昭和二年五月九日、巖は静子(実はしづが正式の戸籍名らしい)と結婚をした。静子は三歳の時に父を亡くし、母一人の手で育てられ、第三高等女学校で田鶴子と同級生になったのである。魯庵は、巖が静子と結婚すると申し出ると、たいそう喜んだ。「カ

フェーの女給やモデル女を引張つて来られても、実は苦情も云ひ憎いのだが、マアこれでよかつた」と知人に語つたという。生涯一度も子供に体罰を加えたことのない魯庵であつてみれば、自分の祖父や父が放縱な生活を送つた因果を覚悟していたらしい。

第十一章で記したように、魯庵は巖の結婚披露宴を親戚一同を集め、借金までして日比谷の東京公會館でおこなつた。種蒔き社以来、無産階級芸術運動に共感を示していた巖は結婚式廃止論や生活改善論を唱えている父と言行不一致だと抗議したのに対して、かんかんに怒つた。それが、明治三十一年に妻の敬子との披露宴なしに婚姻届だけで家庭生活を持った時からの長いわだかまりを清算する魯庵の親戚への面当てだったのである。

巖は、父の家を出て佃島小学校の図画代用教員になり、月島に住んだ。結婚の翌年に長女の莉莎子が誕生した。魯庵夫妻の初孫であつた。きつと、深い安堵を覚えただろう。

昭和三年（一九二八）は、明治維新からちょうど満六十年、中国風の干支で言うと戌申になり還暦といふ年であつた。その年に誕生した魯庵にとつても還暦といふことになる。明けて昭和四年、上野松坂屋が四月の改築落成記念に配り物とする『下谷上野』に収録の「下谷廣小路」を執筆した。その前に、「銀座繁昌記」（『太陽』昭4・1〜2）を発表しているが、其処は少年時に築地から遊びに行った場所、「下谷廣小路」は魯庵が生まれた下谷車坂の三間町は松坂屋から数丁のところであつた。つまり、期せずして魯庵は還暦の本卦帰りに合わせて、生家周辺と子供の頃とを随筆で描いたことになる。それが魯庵の絶筆になつた。

その「下谷廣小路」を書き上げた直後の二月七日の夕方、後架から出た魯庵が茶の間の妻や娘に物を言おうとしたが、舌がもつれて何を言っているのかわからないので娘たちは笑つた。すると魯庵も笑つて二階の書齋に上つて行つたが、すぐ降りて来て、妻に寢床を敷くように言い、自分の口を指した。言語中枢の麻痺が来たという意味である。言葉が話せないのみならず、手に万年筆を持って字を書こうとしても、字形をはっきりと書けなくなつたし、歩行す

るにも脚が自由に動かなくなった。しかし、春になって次第に回復の兆候が見え、まだ不自由とは言え、話も出来るようになり、階段の昇り降りも一人でするようになり、転地療養の話も出たが、病人の希望で大久保百人町から、階下に広い部屋のある家をということで、代々木山谷の家を見つけて転居したのが六月一日であった。

一時はそれで小康状態を得ていたが、その月半ばに重態になり、二十五日には昏睡状態に陥り、六月二十九日午前二時四十分に変調を来たし、遂に午前四時きっかり息を引き取った。享年六十二歳。その日、魯庵の親友の新海竹太郎の子息で彫刻家の覚蔵がデスマスクを採り、電報を受け取って集まった高島米峰、関如来、沼田頼輔、林若樹、宮田脩らが相談の結果、無宗教葬を営むことにし、名称を友人葬とする式次第を決めた。

この無宗教葬というのは、魯庵が無神論者だからではなくて、特定の宗教宗派を信じなかったのを尊重してのことであった。かつて、長女百合子・次男健の葬儀はキリスト教式で行われていたのである。実は生前に尊敬していた築地本願寺の島地大等に魯庵は自分の葬儀に読経を依頼していたのだが、先立って島地師が物故したために常盤大定師に涅槃経一節の読経を依頼することにし、また故人が音楽葬にも興味を持っていたのを考慮して関如来の娘の鑑子の独唱が加えられた。

昏睡状態になってから、魯庵が四年前に自分が死んだら、この葉書を出すようにと次女田鶴子に示した死亡通知書も見つかった。それは、釈尊伝の一節にある涅槃の模様になんで、ガンジス河の流れと沙羅雙樹の花とを図案化したものだった。梵字でニルワナと書いた下に、「父魯庵内田貢豫て病氣のところ養生相叶はず本日午前四時死去致候こゝに生前の御知遇を感謝し謹みて御通知申上候敬具」の文面を四行で印刷するデザインである。その後「追て告別式は来る七月二日午後正二時半青山齋場に於て執行仕候 昭和四年六月廿九日 市外代々木山谷一一四 男 巖」の四行が添えられ、その日の内に郵送された。

翌三十日に幡ヶ谷火葬場で荼毘に付し、七月一日通夜をした。三女茉莉子が魯庵の発病直前に購入した新しいピア

ノを弹奏し、音楽教師の宮沢悦子がシューベルト「臨終」とベートーヴェン「アデライデン」を独唱した。

七月二日午後二時半、青山斎場で「魯庵内田貢告别式」が執行された。その式次第は、一、司会者挨拶（高島米峰）

二、讀經（常盤大定） 三、獨唱（關鑑子） 四、履歴朗讀（笹川臨風） 五、追悼辭（柳田國男） 六、追悼辭

（長谷川如是閑） 七、親戚謝辭（宮田脩） 八、焼香 となっていた。ちなみに關鑑子の獨唱はグノー「アヴェ・

マリア」である。会葬者は六百余名、その中に徳富蘇峰・平福百穂・石井柏亭・巖谷小波・長谷川天深・松山中次郎・

野口米次郎・長原孝太郎・山本鼎・北原白秋・近松秋江・吉井勇・馬場孤蝶・和田英作・副島八十六・秋田雨雀・田

村三治というような名前が見える。丁度一時間で滞りなく式は終了した。当日、東京府知事から政府に叙勲の申請に

ついて打診があったが、遺族友人一同は故人の遺志にそぐわないと辞退した。

魯庵の遺骨は当座は府中の多摩墓地第拾二号区老番に木造の墓標を立て埋葬したが、後に自然石で「魯庵之墓」と彫った墓碑が建てられた。墓碑の表面には魯庵の生年月日と死亡年月日とが、裏面には長女百合子と次男健の生年月日と死亡年月日も刻まれた。なお、戦後昭和二十一年二月五日に亡くなった妻敬子の名前と誕生・死亡の年月日も刻まれていることを書き添える。

(元)

### 註

(1) 困ったことに、昭和女子大学近代文学研究室編「近代文学研究叢書」第三卷所収の内田魯庵著作年表、筑摩書房刊「明治文学全集」第二巻「内田魯庵集」所収年譜、さらに丸善・學燈編集室「學燈」著者目録（1989年5月発行）がこの点について全く無頓着であり、現に「學燈」連載中の紅野敏郎「學燈」を読むも同じ誤りを踏襲している。

(2) 衛藤利夫「魯庵翁の思ひ出」（「古本屋」臨時増刊内田魯庵氏追悼号、昭4・8）によると、たまたま昭和四年二月初、家族の病氣のために腰越で越冬し、吉祥寺に移転した直後、西大久保の魯庵宅を訪問したところ、机の上の原稿用紙を見て「中央公論」ですかと訊ねた時、「中央公論」にも書かねばならぬが、貴方の嫌いなデパートに頼まれて書いている」と答えたそうである。「今から思へば絶筆となった『中央公論』の原稿」とあるが、その原稿は書けなかったと考えるほかない。

絶筆は「下谷広小路」としておく。

付記 昭和四十一年以来、断続して提稿した「内田魯庵伝ノート」を今回で終了します。御愛読いただけただかどうかは知りませんが、長らくの間の掲載に感謝し、やがて、このノートを修訂してみようと考えていることを付記します。